

ば理解は理解の歴史に於てその役を勸め得るものなりといふことは、十分観察——頗る常套の観察である——する事が出来る。即ち人類の歴史に於ては極めて小さい役目をするのである。人類と理解とは全然別種の二の事柄である。讀者は恐らく思想の名によりて屢々大きな運動の行はれて居るのを認めただであらふ。これは過去に於てそうであつたのみならず、現在に於ても亦恐らく同様であらふ。人類を動かす所のものは、思想に對する理解であると考へてはならぬ。思想に對する彼等の信仰である。そして、これは所謂群集に於てのみならず、所謂知識的階級に屬する人士に於ても眞實のことである。

る。或る時代に於て多くの人々が、我等は實證論派であるとか、カント派であるとか、ヘーゲル派であるとか、或は又マルクス派であるとか唱へて居る時、讀者が其處に發見するものは實に是等の人々の、コムト、カント、ヘーゲル或はマルクスの觀念に對して持つ、偽らざる、そして眞に強固なる信仰に過ぎない。只其信仰は装はれて居る（何となれば、其信仰が頗る科學的であり、そしてアダムの失墜後であつて、最早無邪氣な状態でないからである）、そして信仰は語句や抜抄せる學說——之を信する人々の各自の主の權襪——で必ず装はれて居る。信仰とは斯の如きものである。そして是は現在

に於てそうであると同様に、過去に於てもそうであつた。又將來に於ても恐らくそうであらふ。併し或る一の時代に於て、その一般に行はれて居る信仰の一般的性質を決定する所の或る根本的狀態がある。これは信仰ではなく理解の目的物である。イエスの時代に其同胞の間に一般に行はれて居らねばならなかつた信仰は、キリスト、彼等のキリスト、彼等のメシヤ、に對する信仰であつた。故に彼等はイエスを信仰した。

併し此信仰の中に一の宿命的悲劇が包藏せられて居つた、何となればイエスの時代のメシヤに對する觀念は、吾人の既に指摘せる如

くイエスの彼自らをキリストなりとする觀念とは異つたものであつたからである。若しイエスの見識が理知的に把握されたならば、彼等はイエスの教へたキリストの觀念に達することが出来、そして必然是に達することを欲したに違ひない。併しメシヤなる事は天の象徴なくして變更さすには餘りに明瞭な信仰の觀念であつた。民衆はイエスを信仰した故に、若し彼にして王となり、彼等の信仰に於けるメシヤとなることが出来たならば、ガリラヤとユダヤとは悉くイエスの爲めに捲席せられて居たことであらふ、何となれば、彼等が彼を信仰した時は常に彼等のメシヤ、彼等の油灌がれたる王として、

彼を信仰して居たからである。『ホザナ、讃むべきかな、主の御名によりて来る者イスラエルの王』（約翰傳十二章一三）。彼等は彼を信仰した。併し彼の信仰によるにあらずして、彼等自身の信仰によつて信じたのであつた。斯の如く根深く植付けられた信仰の觀念として當時の時局が差迫つて要求して居ると思はしめた所の救の觀念をどうして彼等が變更することが出来たらふ。

理知的理解の缺如して居た所にあつては、天來の象徴、即ち神其物の介在なくしては彼等の信仰を變更せしむることは出来なかつた。此意味に於ては、イエスの死後の初代基督教會の信仰と雖も、

最初は天來の象徴、即ち復活に根據を置いて居たものであることを、記憶して置かなければならない。當時の一般のメシヤに對する信仰も亦、彼は再び來臨して榮光を以て統治すべしと思はれて居た程である故に、決して餘り大して變化されなかつた。キリスト復活後に於てすら、『使徒行傳』に依て見れば、此原始的問題を繰返して居たことが分る。

『弟子たち集れるとき問ひて言ふ』主よ、イスラエルの國を回復し給ふは此時なるか』(行傳一章六)

イエスは世は必ず彼を拒むべきことを豫知して居た、そしてバリ

サイ人も亦、メシヤとしてのイエスに對する民衆の信仰を破碎すべき道を明確に知つて居た。何となれば、彼等は彼に「カイザルに納税することは正しきことなるや否や」といふ事を質すだけで十分であつたからである。カイザル及び總ての壓迫から、イスラエルの子等を救ふべき筈のメシヤは、彼等にカイザルに納税すべしと命令することは出来なかつたのである。併しイエス、即ち彼等を彼等自身から、そして彼等の切迫して居た破滅から救済するために来て居つたイエス、は勿論彼等にその納税すべき貨幣にはカイザルの名と銘刻のある事實を是認せしめて「カイザルの物はカイザルに返

し、神の物は神に返す」やうに教へなければならなかつた。

イエスは世から拒まれざるを得なかつた、そして彼は之を豫知して居た。若し彼がその證しせんとして來りし真理の爲めに、世から拒まれ、そして苦みを受けなければならなかつたのだとすれば、彼は實に、イスラエルの迷へる羊を、その破滅より救ふことは到底出来なかつた。彼が世から拒まれ、そして彼の同胞から理解せられなかつたとすれば、天國に導く爲めの彼の教は何の獲る所があつたであらう。彼が教を説き聞かせた人々は、よし彼等が終には天國に入るべきものであつたにしても、兎に角是に入るべき最後の人々ではあ

るまいか。彼の弟子達すら、彼が権力に依て統治するに反し、反つて恰も罪人の如くに見做されて、その敵の手に苦を受ける時が来れば、彼に憤怒を感じそして彼を見棄てないだらふか。宜なり、彼が罪人と見做された時、弟子等は彼を棄て、逃げ去つた。(馬太傳二十六章五六)。彼の此世の王國が實現されもせず、そして天から彼の爲めに何の助力も来らなかつた爲めに、彼等は遂に彼に憤怒を感じ彼を棄てたのであつた。若し斯の如き事柄が眞に實現して居たらば、彼の敵と雖も亦同様に彼を信仰したに違ないのである。祭司や學者達が左の如く云つて居るではないか。

『イスラエルの王キリスト、いま十字架より下りよかし、然らば我ら見て信ぜん』(馬太傳十五章三二)

斯の如くにして、キリストは肉體以上の苦難を経験しなければならなかつた。

一般に人の熱情なるものは、盲目的であると言はれて居る、原因や、状態や又結果等に就て盲目であると言はれて居る。盲目即ちより普遍的な生存條件に對する見識を持つて居ないことを意味するのである。故に『盲人もし盲人を手引せば、二人とも穴に落ち』るのである(馬太傳十五章一四)。他方、歴史上のすべての刹那に於ては、勿

論一時的ではあるけれども、刹那的情熱は、人生に對する普遍的見識——假令後者が恒に眞實であるとはいへ——よりも遙に多く興味をそゝり且つ刺戟性を持つて居る。自然斯の如き刹那的情熱はその代表者を持つて居る、普遍の見識の側にも亦代表者があるかも知れない併し。『刹那』と『永遠』との間の争に於て目前に勝利を占めむとするものは何れの側であらふか。言ふ迄もなく『刹那』である。何となれば『刹那』は熱情的であり、盲目的であり、そして侵略的であるからである。『ああエルサレム、エルサレム、豫言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ』(馬太傳廿三章三七)。エルサ

レムが豫言者を殺すのは當然である。何となれば、抑々豫言者とは何者ぞ、豫言者の豫言者たる所以は彼が一般人生に對し、又吾人の刹那的且つ熱情的行爲の必然の結果に對して見識を有するが爲めではないか。然らば此見識よりして、民衆向きの指導者、即ち刻々に過ぎ行く『刹那』の英雄となる資格はないのである。人氣取りは到底眞の豫言者の役目ではない。故にキリストは左の如く語つた。

『凡ての人、なんぢらを譽めなば、汝ら禍害なり。彼らの先祖が虚偽の豫言者たちに爲ししも斯くありき。』(路可傳六章二六)

普遍の見識が大なれば大なるだけ刹那の露々たる熱情に遡ふこと

も烈しい。扱て、吾人がキリストの教へた見識に就て考へて見るに、それは餘りに普遍的であつた爲め『刹那』は理解さへすることが出来なかつた程であつたのである。只此相異の點だけが將に叛逆を企て、惹いて破滅に陥らんとする間際にあつて熱狂せる民衆に認められ、そして彼等の憤怒を購つた。そしてキリストは架上の死を遂げたのである。

天國は吾人の内にある筈であつた。天國は態度及び理解の問題であつた。併し畢竟天國は又恰も芥種の如きものである。芥種は種の内で最も小さいものであるが、時と共に成長して遂には樹となるの

である。

『また他の譬を示して言ひたまふ「天國は一粒の芥種のごとし、人これを取りて畑に播くときは萬の種よりも小けれど、育ちては、他の野菜よりも大く、樹となりて空の鳥きたり、其の枝に宿るほごなり。」(馬太傳十三章三一—三二)』

そして總ての知識及び見識の同化作用も亦畢竟それと異ならないのである。即ち其生長は遅々たるものである。

正誤表

頁	行	誤	正
二五八	一四一	歴史 一例を上げれば へロデ	歴史 一例を上げれば へロデ
四一	一	さぞ。』	さぞ。』
八一	三六	穫り給へ』	護り給へ』
八六	九	甚だしく本能的に	甚だしく、本能的に
一〇二	四	祝よ	祝よ
一一四	二	だらちか。	だらうか。
一五四	八	觸りて	觸れて
一六二	六	税史	税史
一六四	四	考へて居に	考へて居た
一七七	四	ない併し。	ない。併し
二〇四	五		



大正十二年五月二十四日印刷  
大正十二年五月廿七日發行

定價【壹円四拾錢】

著作者 小野 豊

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地  
福永文之助

印刷者 東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地  
佐藤保太郎

不許

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地  
警 醒 社 書店

振替口座東京五五三番  
電話銀座五八七番



504  
195

終